

SCHURICHT E L'ITALIA

シューリヒトとイタリア

エンリコ・マーニ・ドゥッフロック

翻訳：西浦 AI

カール・シューリヒトは常にイタリアに特別な愛情を抱いていた(彼は完璧なイタリア語を話した)。そのため、彼はしばしばイタリア半島のオーケストラを指揮するために訪れた。彼のラ・スカラでのデビューは1914年5月で、ブラームス、シューマン、チャイコフスキーの音楽に捧げられたコンサートだった。

彼の同時代人たちは彼を最高の評価で迎え入れた。私たちは、当時の音楽評論家エンリコ・マーニ・ドゥッフロックの記事を再掲することを考えた。このドイツ人音楽家の肖像は1942年に月刊誌「Natura」(第11/12号)に掲載され、人物の活気あふれる姿を心温まるように捉えている。

マエストロ・カルロ・シューリヒトの指揮の特徴をこれらのページで定義するのは簡単なことだろう—もしこれを読む目が、マエストロがどのように指揮するかを一度、二度、あるいはそれ以上見たことがあるならば、なおさらだ。もし読者が幸運にも彼がリハーサルをする様子を見たことがあるならば、この文章に添えられた写真資料だけで、その特別な感想を優しく蘇らせることができる。それは、マエストロの指揮棒が主宰する演奏に、聡明な観客が常に抱く、心に残る感想だ。

そうでない場合、それはとても難しい。なぜなら、シューリヒトがオーケストラに作品の解釈とその細部を、顔と全身の多様な表情を通じて課すと言ったとしても、見ていない人は、聴衆の多様な世界で批判を呼びやすい、あの身振り手振りの激しいポディウムの踊り子の一人を想像するか、あるいは陳腐な決まり文句だと思い、どの指揮者についてもそう言われていると考えるだろう。

ここでは、言葉は完全な解釈と新たな力を与えられなければならない。

マエストロ・カルロ・シューリヒトには神の賜物がある。彼は常に、実現される作品の前に、すべてを楽しむ偉大な子供であり、何よりもまず、色彩と純粋な音を楽しむ。そして、すべてに魅了される。リハーサルでは、トロンボーンとファゴットの重厚な混合音に、まるでこれまで聞いたことがないかのように目を大きく見開く。パッセージが完璧に演奏された後、オーケストラを止め、彼の完璧なイタリア語で—必然的に多少のアクセントと外国風の文法が入るものの—言う:「いいね—とてもいい! しかし…」。そして、トロンボーンの一人、ファゴットの一人に、ほんの少しの指示を与え、この人とあの人に、彼の音の夢に対する素晴らしい愛情ゆえに、その美しい響きをさらに完璧なものに仕上げる。そして微笑み、感謝し、先に進むが、少し先で止まり、全く別の性質のパッセージの色彩を完璧にする:フルート、オーボエ、クラリネットが、ヴァイオリンの素早い連打で作り出される魔法の雰囲気の中で躍動する。そして彼は完全に熱狂する。

—いいね、素晴らしい! しかし……

シューリヒトの「しかし」は有名で、信じがたいことに、少なくともヨーロッパの半分の偉大なオーケストラで愛されている。

……しかし、二番目のオーボエはもっと弱く吹いて、一番目をより良く浮かび上がらせるように。

一番目のクラリネットは素晴らしいが、しかし……各四分音符の最初の音に力を入れる必要がある。お願い、もう一度。あの紳士的な人物が忍耐を失うことは決してない。しかし：

ああ、皆さん、申し訳ない。私がかうまく説明できなかったのかもしれない。このパッセージは素晴らしい。アイデアが形を取り、手を加えるごとに正確で力強いリズムに塑成されなければならない。タタタ！ タタタ！ もう一度、もう一度、皆さん。ほら、今は良くなった。ありがとうございます。皆さんは本当に上手で親切だ！ しかし……

各「しかし」はベールを剥ぎ、予想外の美しさを明らかにする。オーケストラにとって厄介なものになるところか、新たな素晴らしい秘密の啓示として待たれている。シューリヒトは常に彼の素晴らしい「しかし」を用意している。彼は常に、通常の解釈に何かとても美しいものを加える。そして、何より重要なのは、彼が常に輝かしく正しいということだ！

オーケストラで演奏する者は、段階的に、あるいは一瞬で理解する。ヴィースバーデンの素晴らしい住居で数ヶ月間隠者のように暮らすマエストロが、そこから彼独自のビジョン、熟成された解釈の夢を持ち込み、今、それを細部まで実現させる遊びをしていることを理解する。演奏する者は、彼の高貴な顔（……どのギャラリーで見たことがあるだろうか、トック帽をかぶったりマントをまったり、魔術師の署名付きで？）から、第二の譜面台のように曲の色彩と表情を読む。そして、音の夢想家の素晴らしい手が肩を抑えたり、勢いよく押し出したりするのを感じる。

本番の演奏では、すべてが整っている。あの顔と手は、どんな言葉にも代えがたい言語で語りかける。そして、リハーサルでそれらを基に作り上げたすべてを思えば、それらが欠けるなんて考えられないほどだ！ マエストロは決してオーケストラを裏切らない：リハーサルで神の子供の本能から生まれた身振り、態度、表情の遊びが、今や意識的に繰り返され、オーケストラに望む心の状態、推進力、色彩を強制的に呼び起こす。

態度、そう、すべての人格の、そう。どうやってこれを、マエストロが指揮するのを見たことがなく、彼がどれほど紳士的で、完璧に抑制され、最高に優雅で男性的かを知らない人に伝えらるだろうか？ どうやって、彼がほとんど「踊る」ように音楽を指揮すると言うだろうか？ 彼はポディウムで身をよじったりしない。腕を振り回したり、膝を曲げたり、足を踏み鳴らしたりしない。しかし、彼の顔と全身にディオニュソス的な何かがあり、それによって書かれた音符ではなくその超人的な意味、リズムではなくその本質が噴出する——言わせてほしい、笑わないで——足を釘付けにされたニジンスキーのように。その何かは、従属するすべての意志に容赦なく重ねられる。マエストロがこれらの言葉を読んだら、彼がオーケストラのメンバーから聴衆とともに拍手を受け取るときにいつも言うことを言うだろう（今や、どこでもいつもそうなる）。

《ああ、いえ！ この方は間違っている。私はただの伝達者だ。私の良き友である作曲家がこれをどう演奏するかを説明してくれた。私はそれを皆さんに繰り返しているだけだ》。

私たちはカルロ・シューリヒトの指揮の特徴を定義しようと言った。おそらく、私たちの千の言葉より、彼のこれらの短い言葉の方がよく定義している。

これを言ったことをお許しください。しかし、付け加えなければならない——私たちの時代で最も偉大な一人であり、同様の芸術家に事欠かない時代であるが——彼はイタ

リアで稀に見る好意を見つけ、それを同等の度合いと方法で返しており、もしその言葉が乱用で台無しになっていなければ、感動的と言えるほどだ。

特にラ・スカラの団員たちに対して—彼らは最初から最後まで彼のことを話し続けずにはいられない—シューリヒトは特別な愛情を抱いている。

これを書いている者が、数年前のことを懐かしく思い出す。理由を思い出す必要はないが、「アルプス交響曲」のリハーサル後(あの素晴らしいリハーサルは、出席者全員にとってどんな心に残る教えだったか)、彼を迎えに行った。私たちは彼が滞在するレジーナ・ホテルに行き、長く話す予定だった。

そして実際、朝の3時まで話した。しかし、ラ・スカラから出ると空気は冷たかった。彼はコートの手を立、ポケットに手を入れ、近くのホテルに急ごうとした。しかし、パンカの歩道に着くと、突然止まり、振り返り、上を見上げ、四方の建物に囲まれた広場の空の四角を、素晴らしい星空のように眺めた：

《なんてオーケストラだ！ なんて素晴らしいオーケストラだ！ 心の奥まで読み取ってくれる！ しかし、私たちはイタリアにいる！ ああ！》。そして喜びに笑った。それから、指先で、彼の最高の満足の表現として習慣的な小さな仕草で、星々にキスを送った。

出典について：

この文章は MUSICA CLASSICA (MC 2001/2) に同梱されているブックレットに収録されていますが、前書きにあるように、元々は月刊誌「Natura」(1942年 第11/12号) に掲載されたものとのことです。